The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ ゲーム読み物

# ソニックの大冒険

▲チャーミー・ビー（チャミー）

▲タニア

▲ソニック

▲リトル・ジョン

## 魔女の野望

「うわ～ん、ソニックが、おいしそうなシャーペットになっちゃったぁ！」
と、困ってるんだか喜んでるんだか、よく分からない声を上げたのは、ボートの上のリトル・ジョンでした。
「こら！ ソニックのアニキの一大事だってのに、なんてこと言うんだ！」
ブスッ！
チャミーが、リトル・ジョンのポコンと突きでたおなかをハリで刺します。おかげで、リトル・ジョンのおなかは、プワ～ンとさらに大きくふくらんでいきました。
「ぎゃぁ～！ ぼ、ぼくのおなかが！ ぼくのおなかがぁ～！」
もう大騒ぎの、大暴れ。それで、ボートも大揺れです。
タニアは、あわててボートにしがみつきました。
「ちょっとちょっと、チャミー！ こんなトコでやめてよね～！ ボートが、テンプクしたらどうするの！」
「へ～んだ！ アニキのことを、シャーベット呼ばわりするとは許せねぇ！」
「なぁ～によ、自分だって、そのアニキをほっぽって逃げてきたくせに！」
「ぐさっ！」
チャミーは、タニアに痛いところを突かれ



作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

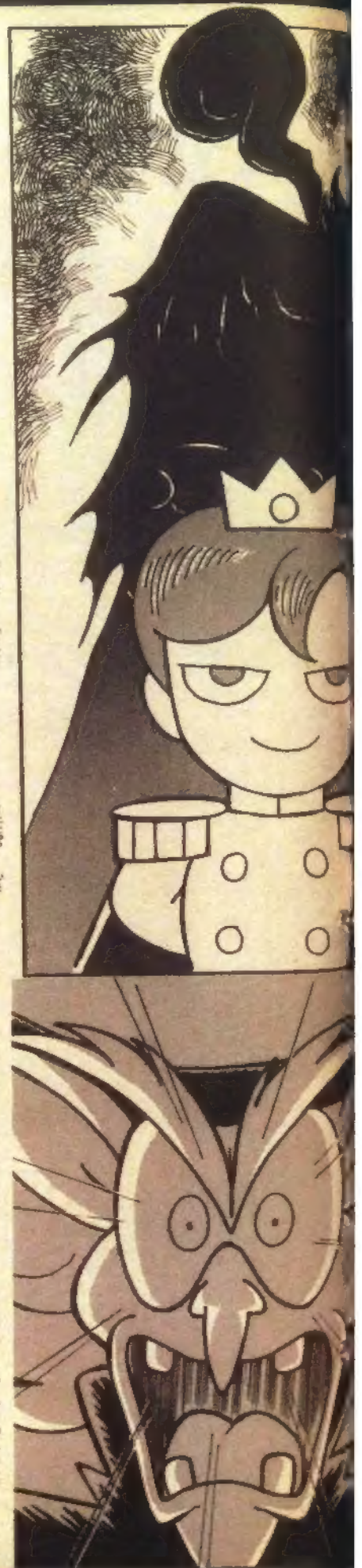
©1991 SEGA

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2021/7/27

て、思わず胸に手を当てました。
そうです。すばしっこいチャミー・ビーは、ソニックのかげに隠れていたために、危機一髪、魔女の魔術を受けずに逃げてこれたのです。
「そ、そりを言ってくりるなよなぁ、そりをよぉ！」
「とにかく、こうしてはいられないわ！」
タニアが、勇ましく言いました。
「お兄ちゃんを早く見つけて、ここから逃げなくっちゃ！」
そうそう！　ニッキは海に落ちたまま、いっこうに姿が見えないのです。
ニッキは、タニアにとって、たったひとりのお兄ちゃん。このままほうって逃げるワケにはいきません。
しかも、ソニックの登場で、ほんの少しの間キャラメル・トイ王国の攻撃から逃れたものの、それもここまで！
「こらこらぁ～、逃がすもんかぁ～！」
ソニックにこてんぱんにやられたベルーカ・ブラザースが、タニアたちを捕まえようと、小舟で大接近してきていたのです。
「あ～ん、来ないでよ～！」
タニアは、ボートの中に置いてあったスケボーの先で、ひっしにボートをこぎ始めました。
さてさて、問題のソニックの運命はというと？
「フム……。ハリネズミのソニックだとぉ？」
キャラメル・トイ王国の帆船の上では、怖～い怖～い魔女が、コチンコチンに凍らせたソニックを、
「いったい、どうしてくれよ～か！」
と、思案しているまっ最中でした。
このまま凍ったままで、どこかのゲームセンターに持っていって、「お客を呼ぶのにいいでっせ」と売り込んだら。
グフフッ……。ケッコウ高く売れそうな気もするし……。（セコイ！）
そうじゃなかったら。
ゲンコツぐらいの大きさに切り刻んで、一個、百円ぐらいで売ってもうける、っていうのもアリだな……。
などと、セコクセコク考えているのでした。
魔女のすぐ近くでは、キャラメル・トイ王国の王子と王女が、あいかわらず生きているんだかいないんだか、よく分からないっていう感じで突っ立っています。
でも、本当は、この二人、ちゃぁ～んと生きているのです。
しかも、自分たちがとっても悪いことをしてるんだっていうことも、よく分かっているのでした。
でも、彼らは、どうすることもできなかったのです。
なぜって？
それは、この魔女に大切な大切な〈魂〉を抜かれてしまっているからなのでした。



著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2021/7/27

†

王子と王女は、もともとお菓子とオモチャが大好きでした。

キャラメル・トイ王国は、一面のキャラメル畑、それにキャンディやポップコーンの木などがあることで有名です。

しかも、乗り物はみんなオモチャのように小さく、人びとは、遊園地にあるような蒸気機関車やブリキでできた馬車で移動します。

それはそれは、平和な国だったのです。

でも、そこへこの魔女がやってきました。

魔女は、国中の人たちがお菓子とオモチャに弱いのを知ると、〈弱いものにやられる魔術〉というのをかけました。

つまり、お菓子とオモチャを手に入れるためなら、なんでも彼女の言うことを聞くという魔法です。

そしてそれは、人びとがいいことと悪いことを判断する〈心〉や〈魂〉を奪うことと、同じでした。

王子や王女はもちろん、国中の人びとが、たちまち魔女の術に落ちてしまいました。

そこで、魔女は、さらに世界征服を狙うことにしたのです。

彼女の計画は、こうです。

まず、世界中のありとあらゆるお菓子とオモチャを手に入れます。そして、彼女の許可がなければ、子供たちは、けっして大好きなお菓子やオモチャを手に入れることができないようにしてしまうのです。

そうすれば、今度は、大人たちをも自分の思うがままにできると考えたのです。

なにしろ、大人は、子供にとっても弱い。子供が、「お菓子が欲しいよ〜！」と泣き出せば、大人たちもシブシブ彼女の命令に従うだろうと考えたのです。

†

## ソニック、ふたたび！

「ぐわ〜っははは〜！ とにかく、さっさとお菓子とオモチャを船に詰め込むんだ。次の港が、待ってるぞ〜！」

魔女は、得意になって叫びました。

ところが！ その時。

風の音にまぎれて、かすかにこんな声が聞こえてきたのでした。

「ヘヘッ！ このオレ様をナメちゃいけないぜ。」

「な、なんだと？」

魔女は、ギョギョギョ！と目を丸くして、目の前の氷のソニックを見つめました。

その声は、まちがいなくソニックの声だったのです。

でも、氷のソニックがしゃべれるはずがありません。

「こ、こいつは、いったい……？」

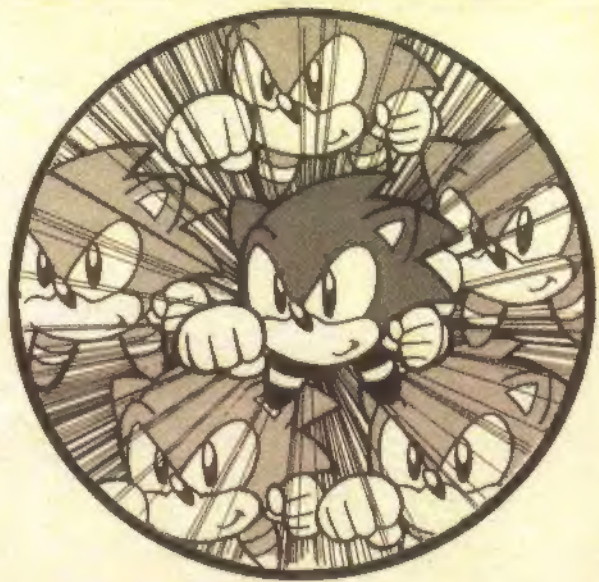
さすがに、魔女もあわてました。そして、そんな彼女をあざ笑うかのように、ソニックの声はこんなことを言ってきたのです。

「そいつは、光速の壁を抜けたオレのヌケガ

**●前回のおはなし**

がけから海に落ちてしまったニッキと入れかわるように登場したソニックは、超スピードの必殺技で、ベルーカ兄弟やキャラメル・トイ王国の兵士たちを次つぎにやっつけた。ところが突然、魔法使いの女が現れ、すさまじい魔力を受けたソニックは、みるみるうちに凍ってしまったのだ…。



著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2021/7/27

ラさ。」
「ヌ、ヌケガラ？」
「そうだ。ヌケガラが、凍ってしまっただけさ。本物のソニック・ザ・ヘッジホッグは、ここだ！」
「な、なに？」
魔女は、次の瞬間、自分の目がおかしくなっちゃったのかと思いました。
なんとなんと！ 何人ものソニックが、空からいっせいに飛びかかってくるではありませんか。
そして、
「ピシッと決めてやるぜ！ そ〜れ〜！〈光速ローリング・アタ〜ック〉！」
ドガドガドガ〜ッ！
何人ものソニックが、一度にどどっと魔女に激突しました。
「うぎゃぁぁぁ〜！」
魔女が、そのすさまじい威力でボワ〜ンと吹き飛ばされていきます。
「ソ、ソニック！」
ふたたび現れたソニックに、タニアもリトル・ジョンもチャミーも、それにベルーカ・ブラザースも、み〜んなビックリ！
その中でも、チャミーは、まさに飛びあがらんばかりに喜んで、
「びゃぁぁぁ〜！ ソニックのアニキ、生きていなすったんですかぁ〜！」
「バッキュ〜ン！」と、ソニックのところまで飛んできて、ペタペタとソニックの体にさわりだしました。
「よせよせ、こら。気持ち悪いだろ！」
「だって。オリはもう、てっきりアニキはやられちまったんだと思ったんだぞい！ ペタペタ・・・ああ、ペタペタ！」
「や、やめろって！ ……へっ。あんな魔術をまともに食らってたまるか！ オレは、ちょっと光速の向こうにいてやったのさ。」
「こうそく、の向こう？」
チャミーは、はじめて聞く言葉に、「ソニャア〜？」となりました。
ソニックが、突っ張った前髪をクシャクシャとかきむしります。
これは、ソニックのクセで、「ったく、しょ〜がねえ〜なぁ〜！」っていう時によくやる仕草です。
「いいか。光速、……つまり光が飛ぶ速さ以上のスピードで走るとだな、人間には姿が見えなくなるんだ。」
「ぎぇ〜、知〜らなんだ知らなんだぁ〜！」
そうです。
ソニックは、魔女の魔術を受けた瞬間、光以上のスピードで逃げていました。そして、光速の壁の向こうで反撃のチャンスをねらっていたのです。
また、魔女が、空から何人ものソニックが降ってくるように見えたのは、彼が飛ぶスピードを落として、光速の世界からしだいに姿

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2021/7/27

を現したからだったのです。

「やっべ〜！」

あわてたベルーカ・ブラザースは、さっさと逃げ出す態勢に入りました。

ところがところが！

「おのれ〜、ソニック・ザ・ヘッジホッグ！」

ザバ〜ッ！と海面の一点に水柱が立ち上ったかと思うと、ふたたび魔女が舞い戻ってきたのです。

「このわたしにはむかうとは、許せん！　魔力の恐ろしさを知るがいいわ〜！」

ファッシュ〜！　魔女は、ありったけの魔力を集中させると、一気にそれをソニックに向かって放ちました。

「ぴえ〜、ア、アニキ〜！」

チャミーが、今度こそ「一巻の終わりィ！」っていう声をあげます。

でも、

「〈光バリア〜〉！」

ソニックは、そう叫ぶと、一瞬またみんなの前からかき消えたのでした。

そして、ソニックが消えたあたりに、巨大なカガミみたいなものが現れたのです。それこそ、ソニックが光速で飛んでいるために出来た光の輪でした。

「ひ、ひかり……バリアー？」

魔女は、驚いて目を丸くしました。

でも、次の瞬間、彼女は自分で放った魔力をまともに食らうことになったのです。

「ぎゃぁぁ〜！」

ソニックは、〈光バリアー〉というカガミを作ることで、魔力をそっくり魔女にお返ししたのです。

魔女は、すさまじい轟音とともに、巨大な渦に飲み込まれていきました。たぶん、深ぁ〜い深ぁ〜い海底まで落ちていってしまったに違いありません。

今まで生気を失っていた王子と王女、それにたくさんの兵士たちが、次つぎに意識を取り戻していきます。

みんな、魔女の魔術から解放されたのです。

「ありがとう、ソニック・ザ・ヘッジホッグ。お礼を言います――。」

王子と王女が、ていねいにお辞儀をしました。

「へへっ、いいってこと！」

ソニックは、まともにお礼を言われて大テレです。

「うふっ、ソニックったら、テレ屋さんなのね。」

タニアが、ぷっと吹き出しました。

さぁ、大カンゲキしちゃったチャミーは、もうコウフンを抑えることができません。

「アニキアニキ！　ど、どうやったら、そんなに速く飛べるんだい？　ねえねえ、オリにも飛び方教えてくり？」

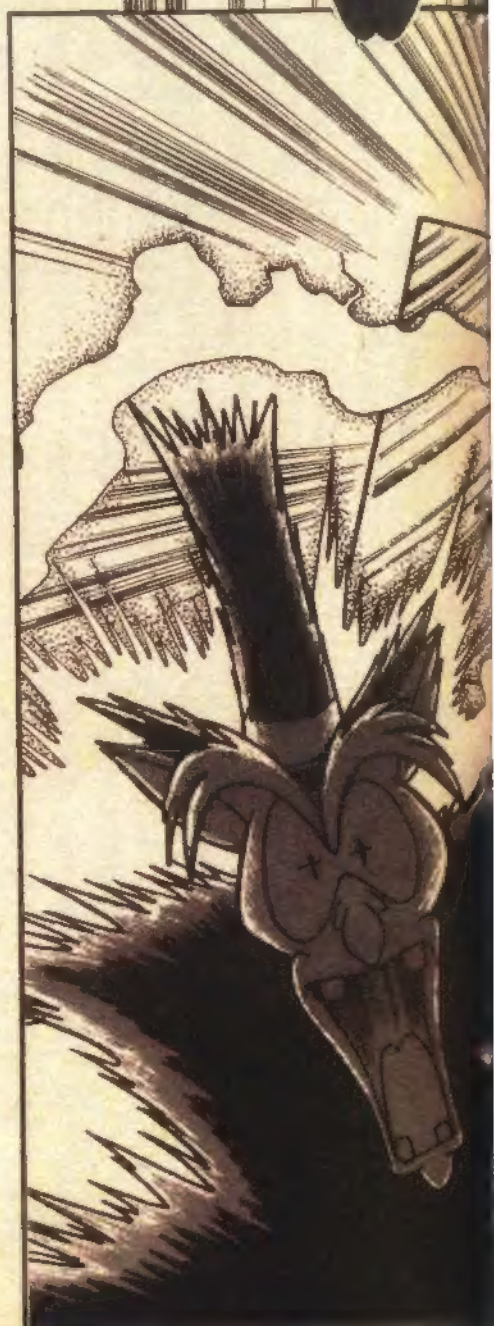
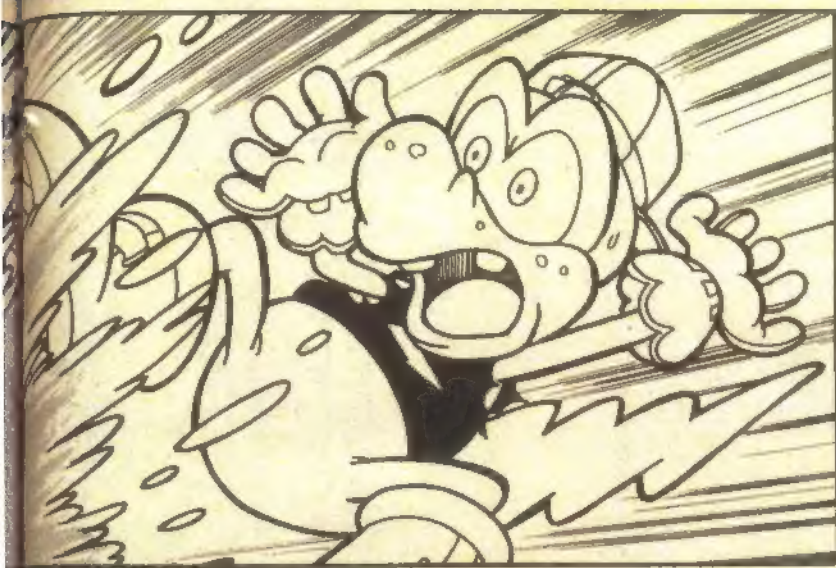
などと、またまた「ベタベタ・・」言って、ソニックにうるさくつきまとってきました。

「う、うるせ〜な！　こ、こら寄るなっつ〜の！」

ソニックが、チャミーから逃げ回ります。

●「ソニックの大冒険」の感想・イラストを送ってね！（あて先）〒101−01　東京都千代田区一ツ橋2の3の1　小学館「小四ソニック⑬」係



著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2021/7/27

これには、みんなも大笑いです。
でも、チャミーのおかげで、ソニックは足を滑らせてしまいました。
「うわ～！」
そして、波柱の上がる海にまっ逆さまに落ちてしまったのです。
そしてそして、この時です！
その場の誰もが、魔女を鮮やかにやっつけたソニックの言葉とは思えない、ほとんどヒメ～！のような言葉を聞いたのは。
「ぎゃぁぁぁ～、オ、オレは、み、水が大っきらいなんだよ～！」

アントン▲

「ええ？」
バッシャ～ン！
そして、大きな大きな水柱を上げて、海の中に落ちたのでした。
「ま、まさかぁ！　ソニックがぁ？」
タニアが、思わずそう叫びました。
ムリもありません。光速を超えるほどのスピードの持ち主が、水が怖いだなんて！

## ニッキのオバケ？

さぁ、このことで一気に勢いを取り戻したのが、なんとベルーカ一家の星、アントン兄ちゃんでした。
「どうわ～っははは～！　よ～し、いいことを聞いたぞ。水ん中なら、このトカゲ泳ぎのアントンにお任せでい！」
そうです。このアントン、アタマはともかく、腕自慢に加えて泳ぎ自慢だったのです。
さっそく、海に飛び込むと、ソニックを捕まえようと泳ぎだしました。
「ぎゃぁ～、ソニックのアニキ、ウソだろ～？　は、早く、飛び出してくりよ～！」
チャミーが、あせってブンブンうなり声を立てます。でも、
「そ～りゃぁ～！　ソニック！　かっくごしやがれ～！」
トカゲ泳ぎ(?)のアントンが、海の中に手を突っ込むと、青いハリネズミをムンズとつかみ上げました。
でも！　……次の瞬間。
「ふぎゃぁぁぁ～！　オ、オバケ～！」
そう叫んで、一気に百メートルぐらい泳いで逃げていってしまったのでした。
はたして、ソニックは、もうオバケになってしまったのでしょうか？
いえいえ、そうではありません。
じつは、アントンがつかみ上げたのは、ソニックではなく、ニッキだったのです。アントンは、ニッキがとうに死んじゃっていると思い込んでいました。それで、オバケをつかんじゃったと思ったのです。
「お、お兄ちゃん！」
タニアは、急いでボートをニッキのほうに向けました。
ニッキは、本当に死んじゃっているのでしょうか？
いえいえ、そうではありません。ニッキは、死んでなんかいませんでした。



著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2021/7/27

# みんなのピンチを救ってくれたソニックはどこに？　次回をお楽しみに！

ただ、ちょっと長い前髪が、ベタ〜ッとオバケみたいに顔を覆っていたものですから、そう見えてしまったのに違いありません。

でも。なぜ？

ソニックの消えた海から、ニッキが出てきたのでしょう。

「ん？　あれえ、どうなってるんだぁ？」

それは、当の本人のニッキもよく分からないみたいです。

いつの間にか、自分は、海に浮かんでおり、それに、キャラメル・トイ王国の王子や王女たちが、ちょっと心配そうに自分を見ています。

「お、お兄ちゃん！　ソニックは？」

「そりそり(それそれ、と言っている)！　ソニックのアニキは、どこだりあ？」

タニアやチャミーが、叫びます。

「ソニック？　いったい、なんのことさぁ？」

ニッキは、目をパチクリ。ウソではありません。ニッキは、その名前を聞くのは初めてです。

それに、オモチャの山から海に落ちたことまでは覚えていても、その後のことは、まったく覚えていないのでした。

あっ、そうだ！――――エミーの置時計！

そうです。そんなことより、ニッキには、忘れてはならないことがありました。

それは、もちろん、エミーが大切にしている置時計です。あれを、持って帰ってあげなくてはなりません。

ニッキは、ホッグホッグ島まで泳いで戻ると、バラバラになったオモチャの山から、エミーの置時計を見つけだしました。

いつの間にか、夕焼けになっていました。

きっと、もうとっくにお父さんが帰ってきている頃です。

釣りに行く約束をしていたのに、こんなことになっちゃって、さぞかし心配しているはずです。

でも、ニッキは、お父さんに自慢することがひとつあるな、と思いました。

それはもちろん、大切な友達の、そのとっても大切なものを持ち帰ってあげられたこと。

ニッキは、そのことを、まず一番にお父さんに言わなくちゃ、と思ったのでした。

それにしても、ソニックとニッキ。

このふたりには、いったい、どのような秘密が隠されているというのでしょうか？

つづく

▲ニッキ



著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2021/7/27